

高校歴史学習における地域素材の活用と学習活動との連関† — 秋田県下高等学校の実践報告を事例として「学習材」の観点から —

外池 智*

秋田大学教育文化学部

本研究は、秋田県下の高等学校地歴科を主な対象に、教職10年目を迎えた各高校教員が自身の代表的実践として10年経験者研修の実施科目「学習指導とその実際 地歴・公民」で報告した事例を取り上げ、地域素材活用の現状と学習活動との連関を明らかにするものである。実践事例の分析に当っては、教える題材としての「教材」ではなく、生徒が学ぶ題材としての「学習材」の観点から地域素材の類型枠組を提示し、実践事例の整理・分析を行った。地域素材の類型枠組に関しては、まず大きく①資料的学習材、②臨場的学習材、③人的学習材に分類した。報告者は15名、実践報告数は29件であり、取り上げられた地域素材は資料的学習材が31件、臨場的学習材が10件であった。最も多かった資料的学習材の中では、文献資料が6件、遺物資料が8件で多くを占めていた。地域素材には、実際の場や実際の人物、そして実物などといった資料の一次性に迫ることが容易という特性がある。このことは、社会事象への本質的理解や事実究明への探究心を養おうとする社会科において極めて重要な特性である。地域素材は、ただ単に「歴史への関心を高めるとともに、主題を設定し追究する学習を充実する」ために活用されるものではなく、事実の本質的追究にこそ活用されるべきである。

キーワード：高校歴史学習、地域素材、学習材

1. 本研究の目的

本研究は、高等学校の歴史学習実践における地域素材の取り扱いについて、「教材」ではなく「学習材」としての観点から類型枠組を提示し、その枠組による事例の整理・分析により、地域素材活用の現状と学習活動との連関を明らかにするものである。具体的には、秋田県下の高等学校地歴科を中心とした地域素材の取り扱いについて、平成16年度秋田県高等学校教職10年経験者研修講座Ⅲの実施科目である「学習指導とその実際 地歴・公民」において、教職10年目を迎えた各高校教員が自身の地域素材を取り上げた代表的実践として報告した実践事例を取り上げ、分析対象とする¹。

2005年1月24日受理

† Using a Local Culture as a Learning Material for Senior High School History Classes—A Case in Akita Prefecture

* Satoshi TONOIKE, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

高等学校では、平成15年度より平成10年度版学習指導要領が全面実施され、地域素材を取り上げた学習が、従来にも増して重視されるようになった。例えば、日本史Bにおいては、「歴史への関心を高めるとともに、主題を設定し追究する学習を充実する」趣旨により、学習の最初の項目として「(1)歴史の考察」が新設されたが、その内容では「ウ 地域社会の歴史と文化」が設けられ、「地域の史跡や諸資料の調査・見学などを取り入れるとともに遺物、伝承などの文化遺産を取り上げ、祖先が地域社会の向上と文化の創造や発展に努力したことを具体的に理解させ²」ることが示された。さらに必修である世界史においても、世界史Bでは、「身近なものや日常生活などに関する適切な主題を設定し、追究させることにより、生徒の歴史に対する関心や世界史学習への意欲を育てる³」として、大項目「(1)世界史への扉」に「イ 日常生活に見る世界史」を設定している⁴。身近な地域素材を活用した学習は、戦前の

郷土教育以来、盛んに提唱され、戦後は地域学習として様々な実践が展開されてきたが、平成10年度版学習指導要領においては、社会事象への関心を高めるとともに、学びへの主体的取り組みを主眼とした「学び方を学ぶ学習」の具体的教材として、小中学校のみならず高等学校においても重視されているのである。

さて、こうした地域素材の積極的活用を示唆した新指導要領の実施から一年余を経て、高校の各教育現場では、実際にどのような地域素材が取り上げられ、またそれがいかなる学習活動と連関して実践されているのであろうか。本研究では、教える題材としての「教材」ではなく、生徒が学ぶ題材としての「学習材」の観点から地域素材に対する類型枠組を提示し、秋田県下の高等学校地歴科を主な対象にした事例の整理・分析により、地域素材活用の現状と学習活動との連関を明らかにしたい。筆者の現在の環境においては、教員養成に関わる学部性格上、附属学校園を中心とした小・中学校との交流は盛んに行われているのに対して、高等学校のとの関わりは比較的疎遠である。また、一般的に授業実践の検討に関しても、小・中学校に比較して高等学校の事例が取り扱われることは少ない。本研究は、そうした実践研究の現状の中で、具体的に秋田県下の高等学校の事例を取り上げ、分析するものである。なお、筆者は、既に秋田県下の小学校について、平成15年度実施された平成15年度秋田県教職員免許法認定講習会の実施科目である「社会科教育学概論」において報告された地域学習の実践事例を取り上げ、秋田県下における地域学習の現状と課題をまとめているが⁵、本研究はこれに続くものである。

2. 「学習材」としての地域素材の類型化

(1) 地域素材の類型化

さて、では実際にどのような地域素材を取り上げた授業実践が報告されたのであろうか。次頁に示した表1が、「学習指導とその実際 地歴・公民」において報告された実践事例の一覧である。報告者は全15名、報告数は一人で複数の報告もあり、全29件であった。内訳は、地理歴史科が全25件で、日本史Aが5件、日本史Bが11件、世界史Bが2件、地理Aが3件、地理Bが4件、公民科が全3件で現代社会のみ、その他「郷土史」「郷土地理」が1件であった。高校の場合、取り上げられる科目は研修

該当者の専門領域の関係上、偏りがあるが、歴史的科目は全報告29件のうち18件と多数を占めていた。

それぞれの授業実践の中で取り上げられた地域素材の内容は、表1に示したように新聞資料や漆紙文書、棟札、各種土器・石器、地域の新旧地図、歴史民族資料館、秋田城跡出土品収蔵庫、六郷の各湧水等、多岐にわたる。これら多種多様な地域素材を典型的に分析するに当たり、どのような枠組が考えられるであろうか。

社会科で取り扱う資料の分類に関して、例えば今谷順重は、①文章資料、②図表資料、③現物資料、④映像資料、⑤音声資料、⑥複合的資料の六つに分類し、以下のように示している⁶。

- ① 図書室に備えられている年鑑・事典類や、子どもたちがもっている参考書にたくさん盛り込まれている文章資料
- ② グラフ、統計、分布図などの図表資料
- ③ 実物、標本、模型などの現物資料
- ④ 絵、写真、スライド、TPなどの映像資料
- ⑤ レコード、録音テープなどの音声資料
- ⑥ VTRなどの、映像と音声の両面を備えた複合的資料

また、谷川彰英は資料の「形態」に注目し、以下の四つに分類している⁷。

- ① 文書資料……図書、パンフレット、文献等
- ② 視聴覚資料…OHP、スライド、VTR、写真、絵画等
- ③ 統計的資料…統計表、統計図表等
- ④ 実物的資料…現物、標本、模型等

上記の分類の場合、例えば「現物資料」や「実物資料」は、一次資料⁸が活用され場合が比較的多く、題材として地域素材が取り上げられる場合がある。また「文章資料」や「文書資料」なども、地域素材である一次資料が活用される場合がある。しかし、これらの分類は、あくまでも授業で使用される資料一般に対する分類であり、当然のことながら、分類の観点として特に地域素材に配慮して分類されたものではない。

本研究では、これらの分類を参考にし、学習活動に活用される地域素材を、「教材」ではなく「学習

表1 各科目別のテーマにおける学習材と学習活動

教科	科目	実施学校	学年	テーマ	地域素材	学習活動	指名数	
地歴科 (5)	日本史 A (5)	大館(1)	2	秋田出身の歴史上の人物について(1)	平田篤胤に関する関連資料(詳細不明)	資料の読み取り		
		大館(2)	2	秋田出身の歴史上の人物について(2)	佐藤信淵の関連資料(詳細不明)	資料の読み取り		
		大館(3)	2	秋田出身の歴史上の人物について(3)	安藤昌益の関連資料(詳細不明)	資料の読み取り		
		大館(4)	2	秋田出身の歴史上の人物について(4)	『解体新書』、小田野直武の関連資料(詳細不明)	資料の読み取り		
		大館(5)	2	秋田出身の歴史上の人物について(5)	小林多喜二の関連資料(詳細不明)	資料の読み取り		
	日本史 B (11)	能代北	不明	八竜町の歴史	不明			1
		秋田西(1)	2	秋田県立博物館の利用(1)	旧奈良家	「江戸時代の農業」での見学		
		秋田西(2)	2	秋田県立博物館の利用(2)	菅江真澄資料センター	「江戸期の文化」での見学		
		秋田南 I	2	学校周辺の史跡見学	高清水公園(鷲ノ木)外郭跡-秋田城跡出土品収蔵庫-秋田城政庁跡	見学		1
		角館南(1)	2	歴史と資料(さまざまな資料)(1)	新旧大曲地区	資料の読み取り, 気付きの発表		
		角館南(2)	2	歴史と資料(さまざまな資料)(2)	チュウ木(千畑町出土), 石製帯金具(大雄村出土)	使用の類推		
		角館南(3)	2	歴史と資料(考古資料からわかること)(3)	各種石器(石鏃・石槍・石斧・石匙)(大館市池内遺跡), 古代体験キット(秋田県埋蔵文化財センター), 各種縄文土器(山内村虫内遺跡), 遺跡写真(協和町上ノ山Ⅱ遺跡, 河辺町石坂大遺跡)	資料観察, 年代順の並び替え, 形状・特徴からの類推, 用途の類推, 住居の特色の確認, 前時代との比較		7
		角館南(4)	2	歴史と資料(考古資料からわかること)(4)	漆の固着した紙・漆紙文書実測図(払田柵出土), 漆紙文書実測図(秋田城跡出土)	資料観察, 題材の類推, 解読体験, 気付きの発表		
		角館南(5)	2	歴史と資料(各資料の特性と歴史研究の方法)(5)	秋田県内に伝わる田村麻呂伝説, 新聞資料(払田柵)	資料の読み取り, 考察		
		角館南(6)	2	歴史と資料(各資料の特性と歴史研究の方法)(6)	後三年合戦絵巻(コピー), 線刻千手観音等鏡像(写真), 棟札(神岡町神宮寺八幡神社)	資料の読み取り, 考察		
		羽後	2	羽後町の歴史を訪ねる	羽後町歴史民族資料館	見学, スケッチ		
	世界史 B (2)	秋田北	3	日露戦争と韓国併合	日清・日露への在郷兵士出兵数資料(詳細不明)	資料の読み取り		1
		秋田南Ⅱ	2	東アジア・東南アジア世界の動向(韓国史)	身近にあるハングル文字(韓国海苔, 海岸のペットボトル等)	収集, 成果の発表		
	地理 A (3)	六郷(1)	1	六郷の清水(1)	扇状地形の地図	地図の読み取り		1
		六郷(2)	1	六郷の清水(2)	六郷の各清水	フィールドワーク		
		雄物川(1)	1	環境問題を身近な校庭の植生から考える	校庭への降雨, 身近な植物, 野鳥の巣・糞	酸性度調査, 変化への気付き		※6
	地理 B (4)	二ツ井(1)	3	地域調査(1)	能代市の新旧地図	読図による新旧の地図の比較, 気付きの発表		
		二ツ井(2)	3	地域調査(2)	能代市役所 HP の「人口の変化」「地域に暮らす外国人の国別人数の推移」	統計の読み取り, 輸入先の推理		1
		二ツ井(3)	3	流通の変化, 農林水産業の変化	地元スーパーでの食料品(バナナなど)・冷凍食品などのデジカメ写真	原産国の推測		
		秋田南Ⅲ	2	地図と地域調査	秋田市の新旧地図	読図, 着色作業, 気付きの発表		
公民科 (3)	現代社会 (3)	金足農業	3	平等に生きるために	花岡事件の紹介(詳細不明)	説明の聞き取り	2	
		秋田	1	基本的人権の保障	秋田県の小中高の男女混合名簿	導入状況の調査, 考察		
		雄物川(2)	3	市町村合併から地方公共団体の抱える問題を考える	横手市と平鹿郡の合併	新市名の応募, 長短所のディベート	※6	
その他	郷土史・観光地理	鷹巣	3	鹿野の歴史	小坂町郷土博物館-大湯ストーンサークル-康楽館	見学		

- ・「テーマ」「地域素材」は、基本的に一時間毎の授業のテーマと、そこで使用された地域素材を示している。
- ・Ⅰ, Ⅱなどは、同一校異報告者である。(1)(2)などは、同一報告者の異事例である。
- ・「教科」「科目」の()内の数字は、項目ごとの総数である。
- ・項目の「指名数」は、実践報告の中から最も印象に残った報告として、他者から課題レポートにおいて指名された数である。
- ・雄物川高校の「指名数」は、(1)(2)合わせてのものである。
- ・「その他」の鷹巣高校の事例は、同校の「情報観光コース」における「郷土史」「観光地理」における実践である。

材」の観点から以下のように類型化したい。

①資料的学習材

- ・文献資料…文書、新聞、雑誌など文字によって記録された資料
- ・遺物資料…土器、石器、木管などの出土品、歴史的遺物
- ・民俗資料…風俗、風習、伝説、民話、歌謡、などの伝承された資料
- ・図像資料…絵画、写真、漫画など
- ・映像・音声資料…映画、ビデオ、録音テープなど録画・録音された資料
- ・地図資料…古地図や現代地図など
- ・統計資料…数値、データなど統計が表示された資料
- ・現物資料…身の回りの日用品など実際生活上で活用されている実物

②臨場的学習材

- ・資料館的施設…博物館や美術館、歴史資料館や民俗資料館など
- ・遺跡・史跡…実際に保存されている遺跡や史跡
- ・地形…断層跡などの歴史的地形
- ・景観…町並みなどの歴史的景観
- ・伝統芸能…地域に伝承される伝統芸能

③人的学習材

- ・戦争体験者…アジア・太平洋戦争の直接戦争経験者
- ・就業者…現在実際に授業単元に関わる職業に就業している人物
- ・異文化理解関係…居住者、留学生など

これらは、教える材料、題材としての「教材」ではなく、学びの材料、題材としての「学習材」の観点から地域素材を分類したものである。この「学習材」という用語に関して若干説明を加えたい。

(2)「学習材」について

「学習材」という用語は、元来、1980年代初頭から加藤幸次らが個性化教育を標榜する中で提唱した用語である⁹。加藤は、授業を授業者の観点ではなく学習者の観点に立った時、さらには子どもの学習実態を個性化といった観点から捉えた場合、授業成

立のために取り上げられる題材は、教える材としての「教材」というより、「学習材」として捉えた方がより適切であると指摘している。

さらに、こうした「学習材」の用語は、実際に今日の生活科では一般的に定着したものとして活用されている。周知の通り、生活科は1989（平成元）年版学習指導要領により、小学校低学年社会科と理科を再編統合して新設された。生活科では、従来の様に教育目標に即した授業成立を目指すというより、まず子ども自身が活動すること、体験することが重視されている。すなわち「目標優先主義」から「活動優先主義」への転換である¹⁰。授業者が教えねばならない、あるいは教える必要があるとされる内容を優先するのではなく、子どもの「活動」や「体験」をまず重視しようという観点である。こうした観点に立つ生活科では、今日、授業のために取り上げられる題材は、「教材」ではなく「学習材」として捉えられている。

さて、こうした「学習材」としての観点は、地域素材を題材とした教材を見直す場合、極めて重要な観点である。前述したように、現行の学習指導要領では、高等学校においても、教師の授業に対する受身的・受動的学習ではなく、主体的・能動的学習を求めている。そして、そのための具体的学習方法として、調査的学習や問題解決的学習の展開を提起しており、その題材や学習の「場」として地域素材の積極的活用を求めている。地域素材の場合、例えば文書史料や土器などの実物資料など、地域で直接手に入る一次資料ばかりではなく、史跡や社会施設など、実在する身近な地域の「場」が学習の対象やフィールドとなる場合がある。この場合、授業者がその「場」を通じて教授活動を成立させるのではなく、学習者による「場」への積極的働きかけが求められているのである。すなわち、筆者は地域素材を活用した主体的・能動的学習を求めていく場合、教える題材としての「教材」ではなく、学ぶ題材としての「学習材」として捉えた方が、より望まれる授業展開の実態に即した捉え方と考える。

よって、本研究では「学習材」としての観点に立った地域素材の類型的分析により、実際の秋田県下の高等学校地理歴史科の実践を事例に、地域素材の取り扱いと学習活動との連関を検討したい。

3. 歴史的科目における学習材と学習活動

表1に示した通り、全29件の報告のうち、日本史、世界史など歴史的科目に関する実践報告は18件と多数を占めた。本研究では、こうした歴史的科目における「学習材」について、中心的に取り上げていきたい。

歴史的科目における学習材としての地域素材の分類は、表2に示した通りである。まず全18件の実践で取り上げられた地域素材のうち、資料的学習材が31件、臨場的学習材が10件で、人的学習材は0件であった。資料的学習材が、地域素材としては最も多く授業実践に用いられていることがわかる。中でも、文献資料は6件、遺物資料は8件で多くを占めている。

(1)資料的学習材における文献資料と遺物資料

さて、資料的学習材において多くを占めた文献資料と遺物資料であるが、文献資料の内容としては、平田篤胤、佐藤信淵、安藤昌益、小田野直武、小林多喜二の関連文献や弘田柵に関する新聞資料で、秋田県出身の人物に関する二次資料が中心である。例えば、大館高校では2年の（生活科学科、選択者9名）日本史Aにおいて、「秋田県出身の歴史上の人物について」の主題学習で、「教科書に登場する秋田に関連する事項（秋田県出身の人物）に焦点をあてる¹¹」として、平田篤胤、佐藤信淵、安藤昌益、小田野直武、小林多喜二の関連文献を取り上げている。

注目すべきは、これらの地域素材を用いた学習活動との連関である。文献資料の場合、まず資料の読み取りが中心となっており、その読み取りからの気付きや考察、意見の発表や対立意見における討議など、資料を読み取った先への発展的学習展開があまり見られなかった。人物に関する説明的二次資料にしても、新聞資料にしても、報告された実践の中では、資料そのものの読み取りで、地域素材の活用は完結してしまっている。

一方、遺物資料の場合はどうであろうか。遺物資料の場合、チョウ木、石製帯金具、石器、土器、漆紙文書、棟札など、県内の一次資料が多く用いられている。例えば角館南高校の報告では、今次改訂で日本史Bで新設された大項目「(1)歴史と考察¹²」のうち最初の中項目である「ア 歴史と資料」を取り上げ、単元を「(1)さまざまな資料」(2時間)、「(2)

考古資料からわかること」(2時間)、「各資料の特性と歴史研究の方法」(2時間)の計6時間で構成し、2年生の日本史学習の導入として実践した事例を報告している。とりわけ、「(2)考古資料からわかること」(2時間)では、各種石器(石鏃・石槍・石斧・石匙)(大館市池内遺跡)、各種縄文土器(山内村虫内遺跡)、漆紙文書(弘田柵出土)・漆紙文書(秋田城跡出土)、棟札(神岡町神宮寺八幡神社)などの県内の遺物資料を豊富に活用し、多様な学習を展開している。例えば石器や土器であれば、学習者はまず実物を手に取りながら吟味の観察をし、推論により年代順に並べ替え、その用途の推測から当時の生活変容の推察へと発展的に考察を進めている。(参考資料参照)また漆紙文書に関しても、やはり学習者は実物を手に取り吟味の観察をした上で、題材の類推、文字の解読体験、解読した内容から律令国家の戸籍関連の学習へと発展させている。

こうした資料的学習材の活用事例は、当然のことながら授業者の授業展開における学習材の位置付けによるが、学習材の本来の性格が端的に現れている典型的事例であろう。特に文献資料の場合は、基本的に文字資料であるため、まず学習活動の当初には、当然に文献そのものの正確な読み取りが重要である。ましてや高等学校の場合、いわゆる指導困難校から進学校まで多様であり、資料の読み取りでさえ困難な場合がある。そのため、実際の学習活動としては、その文献資料の読み取りそのものが目的化してしまい、読み取り後の発展的学習へ展開されないことがある。秋田県に限らず、高校の歴史学習において多く活用されている学習材は、実際にはこうした文献資料が圧倒的に多く、単元に合わせて実物教材としての遺物資料が若干用いられているのが現状であろう。そうであれば、なおさらこうした文献資料の活用に関して、単なる資料の読み取りに留まらない地域素材を活かした工夫が求められる。それには、例えば前述の角館南高校の展開例はひとつの参考となろう。事例は、遺物資料の特性を活かした多様な学習展開であるが、文献資料の展開にもこの手法が援用できる。資料を多数用いなくても、単元や学習活動に合わせた学習材により、その吟味的読み取りと気付き、表現、討議、事実調べなど、地域素材を活かした発展的学習活動を工夫する上で参考になる事例である。

表2 各実践における学習材の分類と学習活動

分類	項目	地域素材	学習活動	科目	テーマ	実施学校	学年	
資料的学習材 (3)	文献 (6)	平田篤胤に関する関連資料(詳細不明)	資料の読み取り	日本史A	秋田出身の歴史上の人物について(1)	大館(1)	2	
		佐藤信淵の関連資料(詳細不明)	資料の読み取り	日本史A	秋田出身の歴史上の人物について(2)	大館(2)	2	
		安藤昌益の関連資料(詳細不明)	資料の読み取り	日本史A	秋田出身の歴史上の人物について(3)	大館(3)	2	
		『解体新書』・小田野直武の関連資料(詳細不明)	資料の読み取り	日本史A	秋田出身の歴史上の人物について(4)	大館(4)	2	
		小林多喜二の関連資料(詳細不明)	資料の読み取り	日本史A	秋田出身の歴史上の人物について(5)	大館(5)	2	
		新聞資料(私田柵)	資料の読み取り, 考察	日本史B	歴史と資料(各資料の特性と歴史研究の方法) (5)	角館南(5)	2	
	遺物 (8)	チュウ木(千畑町出土)	用途の類推	日本史B	歴史と資料(さまざまな資料)(2)①	角館南(2)	2	
		石製帯金具(大雄村出土)	用途の類推	日本史B	歴史と資料(さまざまな資料)(2)②	角館南(2)	2	
		各種縄文土器(山内村中内遺跡)	資料観察, 年代順の並び替え, 形状・特徴からの類推, 生活変化への類推	日本史B	歴史と資料(考古資料からわかること)(3)- ①	角館南(3)	2	
		各種石器(石鏃・石槍・石斧・石匙)(大館市池内遺跡)	資料観察, 用途の類推	日本史B	歴史と資料(考古資料からわかること)(3)- ②	角館南(3)	2	
		漆の固着した紙(私田柵出土)	資料観察, 題材の類推, 解読体験, 気付きの発表	日本史B	歴史と資料(考古資料からわかること)(4)- ①	角館南(4)	2	
		漆紙文書(私田柵出土)	資料観察, 題材の類推, 解読体験, 気付きの発表	日本史B	歴史と資料(考古資料からわかること)(4)- ②	角館南(4)	2	
		漆紙文書(秋田城跡出土)	資料観察, 題材の類推, 解読体験, 気付きの発表	日本史B	歴史と資料(考古資料からわかること)(4)- ③	角館南(4)	2	
		棟札(神岡町神宮寺八幡神社)	資料の読み取り, 考察	日本史B	歴史と資料(各資料の特性と歴史研究の方法) (6)③	角館南(6)	2	
	民俗(1)	秋田県内に伝わる田村麻呂伝説	資料の読み取り, 考察	日本史B	歴史と資料(各資料の特性と歴史研究の方法) (5)	角館南(5)	2	
	画像 (5)	遺跡写真(協和町上ノ山II遺跡)	住居の特色の確認, 前時代との比較	日本史B	歴史と資料(考古資料からわかること)(3)- ③	角館南(3)	2	
		遺跡写真(河辺町石坂大遺跡)	住居の特色の確認, 前時代との比較	日本史B	歴史と資料(考古資料からわかること)(3)- ④	角館南(3)	2	
		後三年合戦絵巻(コピー)	資料の読み取り	日本史B	歴史と資料(各資料の特性と歴史研究の方法) (6)①	角館南(6)	2	
		線刻千手観音等鏡像(写真)	資料の読み取り	日本史B	歴史と資料(各資料の特性と歴史研究の方法) (6)②	角館南(6)	2	
		地元スーパーでの食料品(バナナなど)・冷凍食品などのデジタル写真	原産国の推測	地理B	流通の変化, 農林水産業の変化	二ツ井(3)	3	
		映像・音声						
	地図 (4)		新旧大曲地図	資料の読み取り, 気付きの発表	日本史B	歴史と資料(さまざまな資料)(1)	角館南(1)	2
			扇状地形の地図	地図の読み取り	地理A	六郷の清水(1)	六郷(1)	1
			能代市の新旧地図	読図による新旧の地図の比較, 気付きの発表	地理B	地域調査(1)	二ツ井(1)	3
		秋田市の新旧地図	読図, 着色作業, 気付きの発表	地理B	地図と地域調査	秋田南II	2	
	統計 (3)	日清・日露への在郷兵士出兵数資料(詳細不明)	資料の読み取り	世界史B	日露戦争と韓国併合	秋田北	3	
		能代市役所HPの「人口の変化」「地域に暮らす外国人の国籍人数の推移」	統計の読み取り, 輸入先の推理	地理B	地域調査(2)	二ツ井(2)	3	
		秋田県の小中高の男女混合名簿	導入状況の調査, 考察	現代社会	基本的人権の保障	秋田	1	
	現物 (4)	身近にあるハンゲル文字(韓国海苔, 海岸のペットボトル等)	収集, 成果の発表	世界史B	東アジア・東南アジア世界の動向(韓国史)	秋田南II	2	
		校庭への降雨	酸性度調査	地理A	環境問題を身近な校庭の植生から考える(1)- ①	雄物川(1)	1	
		身近な植物	植生変化への気付き	地理A	環境問題を身近な校庭の植生から考える(1)- ②	雄物川(1)	1	
		野鳥の糞・糞	環境変化への気付き	地理A	環境問題を身近な校庭の植生から考える(1)- ③	雄物川(1)	1	
	臨場的学習材 (10)	資料館的施設 (2)	菅江真澄資料センター	「江戸後期の文化」での見学	日本史B	秋田県立博物館の利用(2)	秋田西(2)	2
羽後町歴史民族資料館			見学, スケッチ	日本史B	羽後町の歴史を訪ねる	羽後	2	
遺跡・史跡 (7)		旧奈良家	「江戸時代の農業」での見学	日本史B	秋田県立博物館の利用(1)	秋田西(1)	2	
		高清水公園(鶴ノ木)外郭跡	見学	日本史B	学校周辺の史跡見学①	秋田南I	2	
		秋田城跡出土品収蔵庫	見学	日本史B	学校周辺の史跡見学②	秋田南I	2	
		秋田城政庁跡	見学	日本史B	学校周辺の史跡見学③	秋田南I	2	
		小坂町郷土博物館	見学	郷土史・観光地理	鹿野の歴史①	鷹巣	3	
		大湯ストーンサークル	見学	郷土史・観光地理	鹿野の歴史②	鷹巣	3	
		康楽館	見学	郷土史・観光地理	鹿野の歴史③	鷹巣	3	
地形(1)		六郷の各清水	見学	地理A	六郷の清水(2)	六郷(2)	1	
人的学習材 (0)								
その他 (2)	花岡事件の紹介(詳細不明)	説明の聞き取り	現代社会	平等に生きるために	金足農業	3		
	横手市と平鹿郡の合併	新市名の応募, 長短所のディベート	現代社会	市町村合併から地方公共団体の抱える問題を考える	雄物川②	3		

・ I, IIなどは, 同一校異報告者である。(1)(2)などは, 同一報告者の事例である。また, (1)-①, (1)-②などは, 同一実践における学習材である。
 ・ 「分類」「項目」の()内の数字は, 項目ごとの総数である。

(2)資料的学習材における現物資料

歴史学習においては、文献資料の他に上記の遺物資料のような実物資料が活用される場合がある。本研究では、こうした実物資料を石器や土器のような出土品関係を遺物資料とし、現存している実物資料を現物資料として区別している。さて、こうした現物資料としては、歴史的科目では世界史Bの身近にあるハングル文字として韓国海苔や近隣海岸で収集されたペットボトルの活用が、事例として報告されている。秋田南高校における2年世界史Bの単元「東アジア・東南アジア世界の動向」での李氏朝鮮王朝に関する授業事例である。導入において、「各自持参してきたハングルのついた物を机の上に置き、各自調べてきたハングルの意味を発表¹³⁾」させている。朝鮮史学習の導入として、対象地を遠いものではなく身近なものとして実感してもらうための地域素材の活用である。

「モノ」には歴史があり、それを活用した多様な世界史学習の試みも報告されている¹⁴⁾。また、現行の学習指導要領においても、「身近なものや日常生活などにかかわる主題、我が国の歴史に関わる主題など、適切な主題を設定し追究する学習を通して、歴史に対する関心と世界史学習への意欲を高める¹⁵⁾」として、世界史Bに大項目「(1)世界史への扉」を新設している。特に、内容の「Ⅰ 日常生活に見る世界史」では、「衣食住、家族、余暇、スポーツなどから適切な事例を取り上げてその変遷を追究させ、日常生活からも世界史がとらえられることに気付かせる¹⁶⁾」ことを求めている。世界史学習では、歴史学習という時間的「遠さ」に加え、距離的「遠さ」があるゆえに、学習内容を身近なものとして展開することが困難である。それゆえに、文献資料ばかりではなく図像資料や遺物資料、現物資料を活用した学習展開の工夫が求められている。地域素材の中で、こうした工夫に耐えうる素材を求めるのは、日本史と比較して容易ではないが、上記の実践のように関連する単元に積極的に活用することは可能であろう。

(3)臨場的学習材

最後に、臨場的学習材を取り上げる。歴史学習に関わる臨場的学習材は全部で9件の報告があった。その内訳は、資料館の施設が2件で県立博物館の菅江真澄資料センターと羽後町歴史民族資料館、遺跡・史跡が7件で旧奈良家、秋田城跡近隣が報告されて

おり、全て日本史での実践報告であった。報告者も、全15名中4名であり、現行指導要領の時数削減にもかかわらず、臨場的歴史学習が比較的多く報告されたことは意外であった。

例えば、羽後高校の場合は2年生日本史B(選択者20名)の「第一部 原始・古代」の単元で、学校から徒歩15分の羽後町歴史民族資料館への見学を実施している。テーマは、「羽後町の歴史を訪ねて」で、配当時間は、授業時間を調整し、見学2時間、後日まとめて1時間を配当した。実施に際しては、「簡単な作業シートを用意し、見学を進めながら町の歴史を捉える」こと、「展示物の中で興味を持った展示品をスケッチする」ことを課題とし、まとめにおいては「後日、学んだこと、見学しての感想をまとめる」として総括している¹⁷⁾。

次に秋田中央高校では、2年Cクラス日本史選択者44名、2年DEFクラス同59名が、通常授業時の枠で、学校から徒歩15分の秋田城跡を見学している。参加生徒数が比較的多数であり、通常時の授業枠で実施した史跡見学としてユニークな実践である。テーマは「秋田城跡の歴史的考察(～地域(郷土)の歴史を知る)」で、ルートは、学校-高清水公園(鶴ノ木)外郭跡-秋田城跡出土品収蔵庫-秋田城庁庁跡-護国神社-学校であった。

最後は、秋田西高校で、日本史の「江戸時代の農業」の単元で旧奈良家の利用、「江戸後期の文化」で菅江真澄資料センターの利用(見学と解説員の説明)をしている。学校が県立博物館まで徒歩20分の立地であり、日本史の授業では複数回利用している。

上記の3件は、いずれも高校から徒歩で10～20分で行ける施設を利用しており、学校立地の利点を活かした実践となっている。上記の通り、各実践は日本史の各単元に関連させて実施されているが、学習活動としては見学の域を出ていないことは否めない。しかし、現在の時数削減の教育課程の中、こうした臨場的学習展開を実施すること自体が困難となっており、学習者に地域素材に直に触れさせてあげたいという実践への熱意とともに、逆風の中であえて実施した授業者の取り組みを評価したい。秋田県下には、上記の秋田城跡の他、伊勢堂岱遺跡、払田柵や江戸期佐竹藩に関わる史跡など、直に触れられる身近な地域素材が実在しているにもかかわらず、実際の歴史学習の中で活用されることは少ない。年間計画や単元構成の精査をし、本報告に見られるような

参考資料：日本史B学習指導案

1. 単元 「歴史と資料」
2. 単元設定の理由 省略
3. 生徒の実態 省略
4. 単元の目標 (1)歴史を考察する基本的な方法を理解させる。
(2)歴史における資料の特性とその活用及び文化財保護の意義について理解させる。
5. 指導計画 (1)さまざまな資料 2時間
(2)考古資料からわかること 2時間 (本時 1/2)
(3)各資料の特性と歴史研究の方法 2時間
6. 本時における指導方法の工夫 台所用品調べ、実物資料の提示、学習シートの使用、班別話し合い活動、班別発見学習、班対抗土器クイズ・石器クイズ
7. 本時の目標 (1)考古資料の特性（地方人・庶民の生活をも示す、資料の数は急増、古い時代のもも原形を留めて残る、腐りやすいものは残らない）をつかむ。
(2)地域にのこる文化財や遺跡の意義に気づく。
(3)先史時代の遺物にふれ、観察することを通して、旧石器～古墳の各時代層をつかむ。

※評価の観点 (A：関心・意欲・態度 B：思考・判断 C：技能・表現 D：知識・理解)

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 5	1. 本時の学習内容	・「前時の最後に遺物を観てもらいましたが、今日からは遺物を観ながら旧石器時代から古墳時代までの総復習をします」	・本時より資料を通して原始・古代を振り返る授業となることを説明する。	
展 開 45	2. 旧石器時代	・作業指示「台所用品を、木製のもの、石製のもの、土製・陶製のもの、金属製のもの・・・など、材料毎に分けてみよう」 ・発問「もし、石製・木製の道具しかなかったらみなさんの生活はどう変わるだろう」 予想される反応----- 不便・生きていけない・・・	・自分ももし丸裸で何も持たずにジャングルのなかに放り込まれたらどうなるか、まず何をするか、想像させる。 ・旧石器時代の人々がいかに苦勞しながら石器の技術を多様かつ精緻なものに高めたか、図説を見せながら説明する。 ・考古学者チャイルドの言葉「土器の誕生は、人類が化学変化を応用した最初の事件である」を紹介し、縄文時代が土器という新しい道具が登場した時代であることを確認しながら提示する。 ・同じ縄文土器でも時代によって文様や器形が相当異なることをつかませる。 ・現代の道具でわざと丸底にしているものはないか、考えさせる。 ・縄文土器は世界の土器の中でも最古の部類に属すること、煮炊きの道具として登場したこと、丸底や尖底は熱効率が良いこと、当初は土に埋設された状態で用いられたらしいことなどを説明する。	・仮想を含む発問を自分のこととして共感的に受け止め、考えているか(A)
	3. 縄文時代	・資料提示→縄文土器5点 ・さわる→観察する→石器クイズ「5つの土器を旧い順番に並べてみよう」(班活動) ・発問「古い土器が丸底だったり、尖底だったりするのは何故だろう」 予想される反応----- 土器製作技術が未熟だった・・・	・同じ縄文土器でも時代によって文様や器形が相当異なることをつかませる。 ・現代の道具でわざと丸底にしているものはないか、考えさせる。 ・縄文土器は世界の土器の中でも最古の部類に属すること、煮炊きの道具として登場したこと、丸底や尖底は熱効率が良いこと、当初は土に埋設された状態で用いられたらしいことなどを説明する。	・資料に関心を抱いているか(A) ・自分たちの意見を筋道を立ててわかりやすく説明しているか(B・C) ・それぞれの土器の相違点や共通点をつかんでいるか(A・B)
	4. 弥生時代	・発問「土器が誕生したことで人々の生活はどう変わっただろうか」 ・確認「土器の発明により、焼くだけの調理から煮る・炊く・蒸す・沸かすなどの新しい調理法が生まれ、貯蔵も可能になったことから移動中心の生活から定住生活が促された」 ・資料の提示→集落・住居・落とし穴のパネル写真 ・資料の提示→石鏃・石槍・石斧・石匙 ・さわる→観察する→石器クイズ「それぞれの石器の用途を推測してみよう」(班活動)	・土器発明の画期的な性格を、具体的な例示(食べ物が衛生的に、柔らかくなり、木の実や貝類など従来食べにくかったものも食べられるようになったこと等)によって説明する。 ・定住化について説明したのち、堅穴住居や縄文環状集落のパネル写真を紹介する。狩猟も定住型狩猟(待ち伏せ猟)が生まれたことを補足する。 ・石器の用途を、形や大きさ・加工法に着目させて推測させる。 ・「古代体験キット」を用いて、石器の用途を説明する。 ・これらのムラは戦争多発を意味しており、稲作開始に伴う農業用水・剰余生産物をめぐめる争いが契機であることを説明し、遺跡からの武器の出土や中国文献の記事がそれを傍証することを示す。	・土器発明のもつ画期的な性格について理解する(B・D) ・発明に対し、真剣に考えているか(A・B)
	5. 古墳時代	・図説や教科書で環濠集落(ホリに囲まれたムラ)・高地性集落(見張りに使ったムラ)について復習し、前傾の縄文集落と比較させる(一斉) ・こうした争いの結果、最大の政治勢力となったのがヤマト政権であり、有力な首長は近畿地方を中心に各地に大規模な古墳を残したことを復習する。	・秋田市地蔵田B遺跡で見つかった弥生時代の集落も木柵で囲まれていたことを紹介する。	・稲作の開始・集落形成の変化・武器の使用・『漢書』『魏志』等の記事が全て一連のものであることが理解できるか(D)
	整理 5	6.まとめ	・本時の感想を書く ・次回の予告	

8. 用意するもの・教材
実物投影機、学習シート、遺跡写真パネル(協和町上ノ山Ⅱ遺跡の環状集落・河辺町石坂台遺跡の堅穴式住居と落とし穴)、古代体験キット「土器資料キット」・同「調理キット」・同「狩と漁キット」(秋田県埋蔵文化センター)、石鏃・石槍・石斧・石匙(大館市池内遺跡出土)、縄文土器(山内村虫内遺跡出土など)

・角館南高校より参加した教諭の資料より作成。波線筆者。

意欲的实施を望みたい。見学の域を超えた臨場的歴史学習の実施は、「場」の持つ学習特性を活かした多様な歴史学習を実現するものである。

4. その他の科目における学習材と学習活動

以上のような、歴史的科目以外には、地理 A の事例が 3 件と地理 B の事例が 4 件、現代社会の事例が 3 件、その他として鷹巣高校の情報観光コースにおける「郷土史」「郷土地理」の事例が 1 件報告された。

(1) 地理学習における学習材と学習活動

地理においては、地理 A、地理 B 合わせて資料的学習材で計 8 件（図像資料 1 件、地図資料 3 件、統計資料 1 件、現物資料 3 件）、臨場的学習材で 1 件の報告があった。特に資料的学習材のうち地図資料 3 件の報告が報告者別では一番多く、やはり地理においては地図が多く取り上げられている。3 件は、二ツ井高校の単元「地域調査」における能代市の新旧地形図の比較、秋田南高校の単元「地図と地域調査」における秋田市の新旧地形図の比較、六郷高校の単元「人々の生活と地形」における扇状地形への巡検と関連した地図の読み取りである。特に、新旧地形図の比較は、前述した角館南高校の日本史 A の単元「歴史と資料」においても、大曲地域の新旧地形図の比較が報告されており¹⁸、地理ばかりではなく日本史においても活用されている学習方法である。

学習活動としては、例えば二ツ井高校では「新旧の地図を見比べ、数分間、各自で変化を読みとらせた後、発表しあう¹⁹」、秋田南高校の「地形図 B をみて地形図 A と比較しながら土地利用の変化を調べる。学校周辺・内陸の田園地帯・水田・畑・道路などに着色する。市街地・海岸部（港周辺）・市街地の範囲を囲み広がり気づく。作業してみて気づいた点を発表する²⁰」などである。基本的に新旧地形図の読図から、その相違への気づき、気づきの発表というように学習が発展的に展開されている。現行の学習指導要領の地理 A では、「地図の読図・描図や地域調査など、作業的、体験的な学習の一層の充実を図るとともに、現代世界の諸課題を歴史的背景に留意しつつ地域性を踏まえて追究できるようにする²¹」ことを「改訂の要点」としている。新旧地形図の比較は、身近な地域の歴史的変遷を地図を通

して読み取ることにに関して、まさに「歴史的背景に留意」した学習活動であると言える。

(2) 現代社会における学習材と学習活動

次に、公民科においては現在、現代社会、政治・経済、倫理の 3 科目が設定されているが、事例の報告は現代社会の 3 件のみであった。内訳は、資料的学習材として統計資料 1 件、その他が 2 件であった。

まず、資料的学習材の統計資料は、秋田高校の単元「日本国憲法と基本的人権」における秋田県の小中高校における男女混合名簿である。学習活動としては、基本的人権の保障における平等権の学習で、身近な事例として男女混合名簿の導入状況を統計から読み取り考察する事例である。また、その他の金足農業高校の事例では、やはり単元「日本国憲法の原則と国民生活」における「平等権の保障」の授業で、花岡事件が口頭説明で取り上げられている。学習活動としては、現代社会の様々な差別問題のうち、「地元の秋田県における史実に触れ、さまざまな差別問題を自分自身の問題として捉える²²」ため、花岡事件を簡単に事例紹介している。二校の事例とも、平等権の学習において身近な事例として、それぞれ地域素材を活用している。

また、雄物川高校では「市町村合併から地方公共団体の抱える問題を考える」として、「横手市と平鹿郡内の町村合併にともなう新市名募集の際に、生徒自身に新市名を考えてもらい、実際に応募²³」した事例が報告された。学習活動としては、新市名の考案と連関して、合併のメリット・デメリットについてディベート形式での話し合いがなされている。市町村合併は、まさに現在進行形の課題であり、新市名募集を通じて社会的事象へ生徒が参加した事例として出色の実践である。

地域素材は、まさに今、生徒たちの身近にある題材であるため、現代的課題を現実性、資料の一次性をもって迫ることが容易である。現代世界の諸課題を取り扱う公民科においては、こうした特性を持つ地域素材を、単元との関連で適切に取り扱うことが授業の活性化をもたらす。教科書の知識の詰め込みに終始することなく、授業者・学習者の身近な地域素材を活かす必要がある。

5. 結語

以上、本研究では、「教材」ではなく「学習材」

の観点から地域素材の類型枠組を提示するとともに、その枠組を用いた事例の整理・分析により、地域素材活用の現状と学習活動との連関について明らかにした。具体的には、秋田県下の高等学校地歴科を中心とした地域素材の取り扱いについて、平成16年度秋田県高等学校教職10年経験者研修講座Ⅲの実施科目である「学習指導とその実際 地歴・公民」において報告された実践事例を取り上げ、分析対象とした。

地域素材には、実際の場合や実際の人物、そして実物などといった資料の一次性に迫ることが容易であるという特性がある。このことは、社会事象への本質的理解や事実究明への探究心を養おうとする社会科において極めて重要な特性である。しかし、実際に歴史学習において地域素材が用いられる場合、例えば日本史であれば全体史（日本史）の地方的展開として、すなわち中央史の地方的事例として取り上げられることが多い。教科書や資料に記載されている事項が、身近な地域の事例として確認できるといった取り扱いである。しかし、地域素材がそうした教科書や資料の「焼き直し」として従属的に活用されることは、歴史のいわば一番肝心な部分を他者に委ねて、他者によって構築された歴史をなぞる行為であり、歴史学習の本質に鑑みれば本末転倒である。

また、現行の学習指導要領では、前述したように「歴史への関心を高めるとともに、主題を設定し追究する学習を充実する」ために地域的素材の取り扱いが勧められている。すなわち、生徒をして歴史に対する興味・関心を持たせることを第一義とし、次に「調べ方・学び方」を学ぶ「方法知」習得の題材としてとして、身近な地域素材を取り上げようとの考えである。しかし、歴史学習や社会科教育の本質に鑑みれば、社会事象への本質的追究、事実への絶えざる探究、事実検証の批判的思考の育成こそ第一義とされるべきである。したがって、地域素材の活用は、本来ただ単に興味や関心を惹きつけ、調べる方法を習得するものではなく、事実の本質的追究にこそ活用されるべきである。

本来、歴史学習における歴史像の構築は、授業者や教科書叙述によって構成された歴史像の学習者への一方的伝達や効率的「詰め込み」によってなされることではない。事実を知ろうとする知的探究の原点に立ち返り、事実研究の果てにまさに学習者である子ども自身の主体的活動としてなされるべきこと

である。歴史学習における地域素材は、そうした事実追究に基づく歴史学習の本質に立ち返り得る学習材であり、決して中央史を跡付けるだけの「焼き直し」的題材や、単に興味・関心を惹き付けるだけの題材ではない。歴史学習における地域素材は、一方的に与えられる二次資料、構成された歴史叙述の提供による歴史学習を見直し、歴史学習の本質的在り方を問い得る学習材である。特に、高校の歴史学習の場合、事実の根拠は教科書や資料集に凝縮され、記載の事項をいかに効率よく消化するかに教師も生徒も終始している現状がある。そして、そこには既成の事実への懐疑、吟味、検証は求められていない。しかし、「教えなければならない歴史」が優先するのではなく、歴史を教える授業者として「教えたい歴史」とは何か、「学びたい歴史」とは何かを問いつつ授業構築に臨みたい。

¹ 加えて、本研究では秋田県総合教育センターの渡部克宏先生のご協力をいただき、同センターに網羅されている全県下の高等学校における2003年度、2002年度の学校紀要へのリサーチを実施している。その中で、本研究の分析対象である平成16年度秋田県高等学校教職10年経験者研修参加者の報告と重複しない地域素材を取り上げた地歴科・公民科における実践報告（学習指導案）は以下の4件のみであった。2002年度では、本荘高校の日本史Bの「農耕の普及と社会の変化」における県内出土の土器や黒曜石を活用した事例。2003年度では、まず日本史Bで大曲高校の「歴史と資料（さまざまな資料）」における一次資料を活用した事例、角館南高校の「地域社会の歴史を探る授業の実践～『享保十三年角館絵図』を使った授業～」、次に地理Aで五城目高校の「地図でみる身近な地域」における高校周辺地図を活用した事例。

また、秋田県教育庁高校教育課においても、指導主事の京久夫先生のご協力により同様のリサーチを実施しているが、平成16年度秋田県高等学校教職10年経験者研修参加者の報告と重複しない実践報告（学習指導案）としての資料は未収穫であった。

² 文部省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（実教出版、1999年）、124頁。

³ 前掲書2、42頁。

⁴ 前掲書2、48頁参照。

- ⁵ 拙稿「秋田県の小学校における地域学習の現状と課題—社会科と『総合的な学習の時間』の実践を事例として—」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要編集委員会編『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第26号（秋田大学教育文化学部附属教育実践総合センター，2004年），1-12頁参照。
- ⁶ 今谷順重「資料」大森照夫他編『新訂 社会科教育指導用語辞典』（教育出版，1993年），112-113頁参照。
- ⁷ 谷川彰英発行人『PartⅡ』（「連続セミナー授業を創る」発行者，1991年）18-21頁参照。
- ⁸ 本研究で述べる「一次資料」は、「実物又は現象に関する資料」（文部省告示第164号（1973年11月30日）『公立博物館の設置及び運営に関する基準』）の意として用いる。なお，二次資料は一次資料を題材とした加工資料の意として用いる。
- ⁹ 加藤は，この「学習材」に関して以下のように述べている。

「くり返し述べてきたように，個性化教育をめざす試みは，なによりも，『教授あるいは教授者』という視点に立つのではなく，『学習あるいは学習者』という視点に立つ。教師が教えるというよりも，学習者が学ぶという観点を大切にす。したがって可能な限り，生徒たちに学習を返すことによって，彼らの主体的な学習活動を保障していきたいと考えてきた。

このように考えてくると，教材とか，教具という使い慣れた表現は不適切になる。代わって，学習材とか，学習具という言葉が用いられるべきである。教材—教具も含んで—という言葉は，あくまでも，教えるための材という意味にとれる。教具という言葉は教えるために，教師が使用する用具で，生徒が学習のために用いる用具とは聞こえない。（下線筆者）」加藤幸次『個性化教育入門』（教育開発研究所，1982年），120-121頁。

- ¹⁰ 谷川彰英『生活科で授業が変わる』（明治図書，1991年）22-23頁参照。なお，谷川は「学習材」の発想をより生活科の「活動」「体験」優先の実態に合わせて，「活動材」の用語を提唱している。（同書，24-25頁参照）
- ¹¹ 大館高等学校から参加した教諭のレポートによる。
- ¹² 「歴史を考察する基本的な方法を理解させるとともに，主題を設定して追究する学習，地域社会に関わる学習を通して，歴史への関心を高め，歴史

的な見方や考え方を身に付けさせる」として，「ア 歴史と資料」「イ 歴史の追究」「ウ 地域社会の歴史と文化」の三つの中項目を設定している。前掲書1，109-111頁参照。

- ¹³ 秋田南高等学校から参加した教諭のレポートによる。
- ¹⁴ 千葉県歴史教育者協議会世界史部会『世界史のなかの物』（地歴社，1999年）参照。なお，実践事例ではないが，世界史実践への学習材提供として宮崎正勝『モノの世界史』（原書房，2002），同『世界史を動かした「モノ」事典』（日本実業出版社，2002年）などがある。
- ¹⁵ 前掲書2，46頁。
- ¹⁶ 前掲書2，48頁。
- ¹⁷ 羽後高等学校より参加した教諭のレポートによる。
- ¹⁸ 秋田県下の5年目研修においても，「享保十三年角館絵図」を活用しながらフィールドワークを実施し，「土地に刻まれた歴史」学習を目指した日本史の実践事例が報告されている。「地域社会の歴史を探る授業の実践～『享保十三年角館絵図』を使った授業～」秋田県立角館南高等学校研修部『2003年紀要角南』第24集（秋田県立角館南高等学校，2003年），21-29頁
- ¹⁹ ニツ井高等学校より参加した教諭のレポートによる。
- ²⁰ 秋田南高等学校より参加した教諭のレポートによる。
- ²¹ 前掲書1，158頁。
- ²² 金足農業高等学校より参加した教諭のレポートによる。
- ²³ 雄物川高等学校より参加した教諭のレポートによる。

※本研究の資料に関して，研修参加者のご協力に感謝申し上げたい。また，その他秋田県下の実践事例に関する資料収集に関しては，秋田県総合教育センターの渡部克宏先生，秋田県教育庁高校教育課の京久夫先生に，ご多忙にもかかわらず懇切なご協力をいただいた。ここに，深く感謝したい。

Summary

The present paper is a report of an in-service teacher training course that was held at Akita University, 2004. The course, of which purpose

was to examine how to put the MEXT Course of Study into practice, was offered to a group of teachers who had been teaching at high schools for over ten years. The focus of the session was placed on the use of materials incorporating various issues relating to the history of the area where the school was placed. The participants brought the materials they had developed for students, and presented them for subsequent discussion. During the course, a total of 15 teachers presented 29 cases. The materials presented, which would best be described as 'learning' materials rather than 'teaching' materials, were classified into three categories: (1) documents, (2) realia, and (3) personal. The largest number of materials reported were documents (31 cases), and the next largest was realia (ten cases). Amongst several types of documents were included six written documents and eight relics. One of the advantages of regional materials is that they serve as first-hand materials that provide students with direct or first-hand experiences. However, the value of this type of materials should not be restricted to helping students become interested in history by topic-oriented research, as recommended by the MEXT Guideline; but rather the materials ought to be used for helping students understand social phenomena by seeking for the fact, which is the core purpose of social studies.

Key Words : "Learning" Materials Connected with a Community, The History Learning, High School

(Received January 24, 2005)